Title	初期ヘルダーにおける民族詩としての旧約聖書
Sub Title	Das Alte Testament als nationale Poesie beim frühen Herder
Author	浜田, 真(Hamada, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1991
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.59, (1991. 3) ,p.385(56)- 403(38)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大濱甫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00590001-0403

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期ヘルダーにおける民族詩 としての旧約聖書

浜 田 真

1.

ヘルダーは『人類の最古の文書』、『ヘブライ詩の精神について』等の諸著作によって旧約聖書学史に独自の重要な位置を占めている。旧約聖書を文献として批判的、分析的に検討し、その歴史的民族的背景を明らかにする緒論学は、18世紀にその具体的な形態をとるにいたったとされるが⁽¹⁾、その土台となるアイヒホルンの『旧約聖書緒論』はヘルダーとの親しい交際から刺激を受けて成立した⁽²⁾。また、旧約聖書を形態上、テーマ上、言語学的ないし文学的側面から検討する文芸学的考察は、オックスフォード大学教授ロウスのパラレリズム（平行法）の発見に始まるとされるが、20世紀初頭のこの学的确立者ともいべきグンケルはヘルダーの影響によって研究の基本方向を定められたのであって、ヘルダーの審美的旧約聖書解釈が文芸学的研究の展開に重要な役割を演じたことはすでに定説となっている⁽³⁾。

「神聖な書の美について判断を下すことは長いあいだ憚られてきた。なぜならその詩的側面ですえも直接的な神の働きと認められていたからだ⁽⁴⁾」。聖書の記事を一点一画にいたるまで神聖視し、そこに批判検討の入る余地のないことを疑わなかった人々の間であって、このように語るヘルダーの念頭にあったものは、聖書にみられるさまざまな詩的形態やテーマを超越的絶対者に還元してしまうのではなく、それらを太古のヘブライ民族の実際の生活と心情とから導き出し、捉え返そうというねらいであった。

「どの民族にとっても文芸は自然なものである⁽⁵⁾」。この確信がヘルダーの考の基礎をなしていた。人間はどの民族にあっても、ひとしくその「自然の能力」によって自己の思想や情動を表現し、それに応じた詩句を語り、詩的形象を作り上げることができるのであってみれば、旧約聖書の詩的美を神に直接、無批判に接続させることは、むしろその真の詩的価値を見逃すことに繋がるであろう。旧約聖書もヘブライという一族から生み出された詩作品であるならば、他民族と共通する人間的、自然的な詩の生成過程がそこに跡付けられるにちがいない。これがヘルダーの基本的見解であった。

もちろん、その一方で彼にとって旧約聖書の神性は疑いえない重大な事実であった。『ヘブライ詩の精神について』ではヘブライの詩の民族性と歴史性とを生成的に考察することは、その根底に脈打ちながら働き続ける宗教性を明らかにすることと本質的に連関していた。ヘルダーにとってヘブライの歴史は神の摂理による世界史の歩みにおいて要の位置にあり、したがって旧約聖書は他のどの民族にも見られない神との直接の交わりに基づくものに他ならない。ヘブライの詩によってのみ人類の歴史に神の業が確認されるのである。また、『人類の最古の文書』では旧約聖書、特に創世記が神の原啓示として考察されている。創造の記述において神の側からの働きかけが明らかであり、それはヒエログリフとして、人類の英知の揺籃となる。原啓示において神と被造物との根源的な融和が生じ、そこから人類のすべての道徳、宗教、芸術、歴史が展開する。すなわち人類の営みはその始点において神的基礎づけを不可欠の条件としており、創世記において人類の営みの方向はすでに本質的に規定されていると解釈されるのである。あるいはまた別の箇所では「聖書が美しく叙述されているから神的だということにはなるまい。聖書の神性についてはそれよりずっと確かな特徴がある⁽⁶⁾」という叙述が見られるが、彼にとってその特徴とは聖書の歴史的文献という客観性を越えた信仰の領域のことがらであった。つまりヘルダーにとって旧約聖書に啓示された宗教的内実とは、個人の存在とその内面性に決定的な作用を及ぼすものであり、それは旧約聖書の民族詩とし

ての側面とともに彼の聖書解釈において重要な位置を占めていた。

ヘルダーのこのような基本的立場を踏まえた上で、本論考では彼の初期の旧約聖書解釈のありかたを辿ってみたい。ヘルダーは、時代に応じて絶えず自己の思想を批判し再検討することを続けた思想家であるが、実際その諸著作には時期ごとの立場の変化が顕著に認められる。それが矛盾とされるか、思想の多面性とされるか、あるいは思想の衰退と受け取られるかは解釈者によってさまざまである。本稿の目的は、ヘルダーにとって基本的思想形成の時期であったケーニヒスベルクおよび前期リガ時代に溯り、その時期の彼の見解を当時の時代主潮との連関の中で追うことによって、初期ヘルダーの思想が中期以降の思想に対してとる位置を明らかにし、その特性および問題点を考察することである。その際われわれは特に、1766、67年のリガ時代初期の執筆とされる⁽⁷⁾『叙情文芸史試論』に注目したい。この著作は当時、比較的明確に彼の旧約聖書解釈のありかたを示した作品のひとつであり、そこにはすでに述べた、ヘルダーの各時期を通しての中心的課題であった、聖書の民族詩と宗教性というふたつの側面に関する考察が、おぼろげながらもすでに提示されている。彼の旧約聖書解釈において常に重要な位置を占めていたこの問題が、当時どのような視点から把握されていたかを考察することは、彼の初期の聖書理解の特性を探る上に重要な手掛かりを与えてくれるであろう。

2.

1762年に始まるケーニヒスベルク時代に、ヘルダーが神学生として大学に籍を置き神学の研究を志したことはすでによく知られているが、当時はキュプケ、アルノルト、リーリエントールが講義を行っていた⁽⁸⁾。キュプケは旧約聖書釈義を、アルノルトは道徳神学と説教学を、リーリエントールは教会史、教義学を担当しており、後二者はピエティスムスの精神によって教条主義的色彩を弱められた正統信仰に立脚していた。彼らの講義には特別な革新的視点もなかったが、ヘルダーに神学上の基本知識を与え

比較的大きな影響を及ぼしたのはリーエンタールであったらしく、その講義は正統主義のスコラの傾向を脱し、神啓の啓示と理性とを仲介する意図をもって行われていた。その一方でヘルダーはこれらの大学の講義に飽き足らず、当時の新しい神学上の潮流に関心を引かれていた。それは、ミヒャエリス、エルネスティ、ゼムラーに代表される新解釈（Neologie）と呼ばれる研究立場であって、18世紀の中葉から後半にかけてその活動の隆盛期を迎えていた⁹⁾。教義体系の厳密な構築を目指しながらイギリスの理神論の影響によって硬直化し形骸化した正統主義に対して、彼らは聖書それ自体を研究の中心に据えた聖書主義に立脚し、従来の学問方法の転換を要求した。すなわち、言語的、地理的、民族的特性についてのさまざまな学問的考察を経て、聖書を文献として、その歴史的成立期における効用との連関から考察したのであり、このような研究方法は聖書の客観的、批判的歴史解釈を展開させることになった。

すでにモールンゲン時代にトレジョを通して教会の形式主義に疑念を抱き、ケーニヒスベルクではカントによって教条主義に批判的となったヘルダーにとって、これらの新解釈学者の立場は刺激に富むものであった。これによって厳密な教義体系の枠内での聖書の字義拘泥から離れた、反教義的で自由な神学が彼の心を占めることになる。そしてその中でもミヒャエリスからの影響は彼の研究の方向づけにとって重要な役割を果たした。ミヒャエリスはすでに述べたロウスの『ヘブライ人の聖なる詩について』を詳細な注と補遺を添えて訳出し、その文芸学的聖書解釈をドイツに紹介した人物であるが、自身もオリエント研究者として、広範なオリエント諸国語の知識に裏付けされて、ヘブライの民族詩の紹介およびその特性の研究に努めた。ヘルダーのヘブライの民族文芸への関心は彼によって促されたのである。加えて、ハイムも指摘するように¹⁰⁾、当時の若きヘルダーの関心が神学の専門研究の枠内に限定されない幅の広さを具えており、特に文学、美学、哲学領域への造詣の深さが大きく働いて、ここに旧約聖書の神学的研究と美学、文学研究とがひとつに合流してヘルダー固有の考察方法が生まれることになった。それをわれわれは、彼の『叙情文芸史試論』に

認めることができる。

この著作の基本的意図は先ずなによりも、旧約文書を人間の言葉である文芸作品として見ることにあり、すなわち歴史上の一民族の詩作品としての旧約の側面を明るみに出して探求することであった。例えば、67年に書かれた『人間の救いの源泉である聖霊について』（原文ラテン語）という神学論集の中に次のような箇所が見出される。

「神聖な書に用いられている言葉はもっぱら人間の語る言語に由来するものである。それは地理、時代、民族そして個々の記述者による人間的諸状況から生み出されたのであり、読者の人間的理解力に向けられていた。……神聖な書における文芸と修辭を天に起源のあるものと見なす人々の仕事をわたしは評価しない。彼らはそうすることで聖霊に文芸の教師という名譽ある職を与え、その霊感をほとんど詩的熱狂に変形してしまっている⁽¹¹⁾」。

当時の神学界においては、プロテスタント正統主義を奉じる多くの人々にとって、聖書は唯一絶対のカノンであり、その神聖は疑う余地のないものであって、彼らの間では聖書の一語一句が神的霊感に基づいているとする『逐語霊感説』が堅持され続けていた。そして多くの学者が様々な分野でこの聖書の神聖の擁護に努めており、なかでも統計学者であり聖職者でもあったジュースミルヒは、その広範な統計学的資料を元に、言語の起源は神に直接由来すると見なす言語神授説を唱え、『逐語霊感説』を側面から援護していた。ヘルダーはこのジュースミルヒに代表される言語神授説を念頭に置きながら、それを批判し聖書の言葉の人間性を強調する⁽¹²⁾。ヘルダーにとってそもそも言語とは、人間の世界に対する関わりの中の中心的媒介であり、人間存在にとって根源的かつ自然的なるものであった⁽¹³⁾。言語は生の形成力として人間の自己発展と共にあり、それぞれの時代、風土に規定されながら民族の思考様式と密接な連関を持つ。したがって彼によれば、言語は人間外の超越的根拠を持つものでは決してなく、民族と相即不離の關係にあってその文化段階に応じて歴史的に多様に変化していくのであり、その意味において旧約聖書の言語も例外ではない。そしてまた、へ

ヘルダーにとって言語は、人間の認識行為の根底を形成しながら、世界内の多様な諸事象を人間的、類推的に統一するという対象の比喩化、象徴化をその本性とする点で芸術と同列にあり⁽¹⁴⁾、それゆえ旧約諸文書はヘブライ民族の言語芸術作品に他ならなかった。ここに彼の旧約聖書の人の言葉としての解釈の基礎が認められる。

さて『叙情文芸史試論』という題名からも明らかなおおりに、民族詩として把握された旧約聖書は文芸一般の歴史の内に位置づけ直されることになるが、その際、別の観点から言えば、文芸とはそもそも一体何であるのかといった文芸の人間にとって持つ本質的意味が改めて問い直され、その視点から旧約聖書が捉え返されることになる。ヘルダーの意識においては文芸一般のありかたに関する考察は、同時に、旧約聖書それ自体の理解に直接接続していた。そして、ヘルダーにとって、文芸の本質が考察される場合、その考察は起源の問題との関わりから進められるべきものであった。

「対象の起源をたずねることは、対象について十分な理解を求める上で楽しいばかりでなく必要でもある。……それは歴史の全体としての理解にどれほど貢献することだろう。その上、それが後にそこからすべてのものが派生する歴史の最も重要な部分であるならばなおさらのことである。樹木が根から出てくるように、芸術の進展と開花はその起源から導き出されねばならない。起源は自らの内にその産物の全本質を内包している。それはちょうど種子の内に植物全体がその細部に至るまで完全に含まれている通りである。それゆえわたしは、(起源ではなく)後の状態から解明を行うことが、どの程度生成的な説明として可能であるか理解できない⁽¹⁵⁾」。

このヘルダーの言葉からも窺えるように、彼にとって起源とは事物がなんの被いもなくその本性のままに顕現する一点であり、存在の始点であると同時に立脚点である。起源に溯ることは対象の存在意義をその本源において確認することであり、また、その時間的歴史的展開の真の相を明らかにすることでもある。ヘルダーの考察法の特徴のひとつは対象をその時間的な発展に依りながら生成的 (genetisch) に捉えることにあるが、その際

重要なことは、誕生、成長、衰退という生の統一的連関を分断して個別的に考察し、それを随意に繋ぎ合わせて全体の理解を意図することではなく、なによりも先ず一連の生成過程の始点に立ち戻ってその位置から対象を通時的に把握することであって、それによってのみ統一的、調和的全体が姿を現すのである。ヘルダーにとって、起源とは多様な時間的展開の諸相を根本においてひとつに纏める結び目であって、それを見逃しては展開の矛盾を含んだ多様性に振り回されるだけである。

そしてまた、起源に溯りそこから生成的に文芸のありかたを探っていくこのような考察方法は、ヘルダー固有の人間学的関心に由来している。大学ではひとつの専門分野に限定されることのない多方面の関心を持ち、様々な領域に活動の範囲を広げたヘルダーにとって、その多面性を統括する中心的問題はなによりも生きた人間それ自体、すなわち有機的連関に支えられながら不断の活動を展開する統一体としての人間に他ならなかった⁽¹⁶⁾。自己の人間論をプロタゴラスの「人間は万物の尺度である」という有名な言葉を引き合いに出して展開し、人間の認識行為の根底には類推(Analogie)があり、その特性は比喩化作用(allegorisieren)であると規定するヘルダーにとって、すべての事象は人間との関わりの中で初めて意味を持ち、探求すべき価値あるものとなる⁽¹⁷⁾。そしてこの人間存在を根底で支えているものは活動力、生産力としての生命であり、それは物理的数量的变化を越えた新たな高次の地平への絶えざる飛躍をその本性としている。したがって、生命は抽象的思弁的な観念によっても、対象の分析と計量化に基づく数理的法則性によっても把握不可能であって、それは継続的な自己発現と自己展開とに支えられている限り、時間的にその発展のありさまを追うことによって初めて真に理解される。有機的組織としての人間はその生命の発現過程の総合的理解を通して明らかになるのである。そして文芸は人間の世界との関わり方の本源的表現であり、人間の生のありかたと不可分に結びついているのであるから⁽¹⁸⁾、文芸の根源的意味の探求にとってその生成過程を通時的に追うことはヘルダーにとって必須の条件となる。

さて事物の起源を探る場合、その最も有効で確実な方法は文字という表

記の技術を拠り所にすることであり、実際人類のいかに多くの発明がこの技術に基づいて産み出されたかは諸文明を一瞥すれば明らかである。しかしヘルダーによれば、人類の所産の中でも文芸に関しては「その起源と発展期と最盛期」とは文字による表記以前に溯ることができる。それは口承であり、何世代にも渡って人々の口から口へと語り継がれながらその都度新しい様相をも帯びて展開していく語りである。そしてそのような種々の口碑の内の一部が文字によって記述され文書として残されることになる。

「原初の詩がそれ自体で最も完全であるというのは、完全な人間が母の胎から生まれ出るように不可思議である⁽¹⁹⁾」。ヘルダーにとって、文芸の起源は記述による明確で完全な形態を具えたものとして認められるのではなく、それはいわば歴史の「不明瞭な混沌の胎」とも言える、形を取らずに流転し続ける伝承の内に求められねばならないものであった。

「事物が完全な形をとる以前の最初の歩みと試みとは、物の数にも入らぬ些細な部分と見なされている。一と呼ばれる点から考察は始められ、分数まで追い求められることはない。……なるほどこのような歴史考察は容易で明瞭で、著しい過ちは犯さない。しかし十分には正確でないし、ましてや実り豊かでもない⁽²⁰⁾」。「すべての民族がこれらの富（詩的美と詩的形象）を一民族から窃取したとか、すべてを東洋人から獲得したといった仮説はあまりに恣意的にすぎる⁽²¹⁾」。すでに述べた文書としての聖書の絶対化は、当時の文芸学上の考察にも及び、多くの研究者がヘブライ中心の世界観の確立を文芸面から援護すべく、文芸の起源、概念および特性をすべからずヘブライ一民族から導き出し、その普遍化、一般化に努めていた。ヘルダーのこれらの見解は、現存する旧約文書が文芸の唯一の源泉であり、そこから世界中のすべての文芸が派生したとする、ヘブライ中心思想に基づく主張を攻撃するものであった。彼にとって、すべての民族がその独自の文芸の源泉をひとしくヘブライという特殊な一民族から受け取ったとは考えられず、文芸は各民族に自然なものとしてその固有の民族性の内に内在的に求められるべきものであった。世界史に登場した多様な民族のそれぞれ独自の文芸を視野に入れ、そこから類推して起源を考察すること

をヘルダーは目指しており、記述という明確ではあるが後の時代に属す発明から短絡的に起源を捏造することは慎まれねばならない。ヘブライの文芸はここに他民族の文芸と同列に並べられ、旧約諸文書の絶対性はその文芸的側面において相対化されることになる。そしてこの考察方法は、神学の領域内では、旧約の内実をその諸文書の記述以前に溯り、他民族との類推で探ることを促すことになり、それは当時のスコラ的な正統主義の教義の絶対性を否定すると同時に、文字として記述された聖書それ自体の権威を失わせることにさえ繋がった。聖書の文芸的側面を強調し探求したロウスやミヒャエリスでさえ、伝統的教義に抵触することを憚り、聖書の神的権威は絶対的なものとして不問に付したのであるが、聖書を民族文芸として相対的に位置づけ直すヘルダーの考察は、彼の本意如何によらず、そこまで問題を徹底化させることになったのである⁽²²⁾。

3.

執筆期が1765年前後とされており、『叙情文芸史試論』の準備的草稿とも見なすことのできるヘルダーの断片論文『歌謡一般の起源について』の冒頭には次のような一節が見出される⁽²³⁾。「詩 (Poesie) は人類の母国語である。そして詩人の母国語は歌謡 (Lied) である。歌謡から後に文芸の他のすべてのジャンルが生まれた。この歌謡という詩芸から簡潔な散文が分離成立するまでは、文芸はいっそう複雑に、華やかになっていった⁽²⁴⁾」。あるいは67年に執筆された『近代ドイツ文学断想』第1集では、言語の発展のありかたを個人の年齢段階から類推して考察するという、有名な言語年齢説が提示されているが、そこでも次のような箇所が認められる。「ホメロスのネストールさながら、詩歌が口から快く流れ出し、耳に囁きかけていた。……この言語の青年期はまさに詩の時代に他ならなかった。日常の生活で歌謡が口ずさまれ、詩人はおのが抑揚を心地好いリズムへと高めた。言葉は感覚的であり、奔放な比喻形象に満ちていた⁽²⁵⁾」。彼によれば、言語は感性的な音声の支配する幼年期から、詩の時代である青年期を経

て、壮年期の散文の時代へと進み、ついには、美より思慮が重んじられる哲学的時代に至るのであるが、詩は言語の精華としてその隆盛期を代表すると同時に、この一連の言語の発展を大本で統括する基ともなるものであった。

このような見解からも明らかなように、口承の内に文芸の源を求めたヘルダーにとって、そこからすべてのジャンルが派生する文芸の原初形態は詩に他ならず、文芸の本源的ありかたは専ら「詩の時代」に溯って考察されることになる。そして彼によれば、その「詩の時代」にはまだ「歌うことと話すこととは同一」であり、「歌は餌のように他の餌を呼び起こし」、世界は歌謡を中心に形成され統一されていた。言葉はそれ自体が固有のアクセントを具えており、他の言葉のアクセントと呼応してひとつのリズムをもった歌をつくり上げるが、それは民衆の生活に基づき民族固有の感性に応じたものであって、人口に膾炙し代々受け継がれるべき性質を具えていた。ヘルダーはどの民族においても文芸の最初の産物は歌謡としての詩に他ならなかったと推測するのである。ところでここで重要なことは、詩の本質的要素である歌謡という側面にヘルダーが注目し、詩の音楽的流動性とリズム性が持つ意義が改めて強調されている点である。彼にとって民衆の口の端に上る自然な歌とは、シラブルや文字による「生命なき絵画」(die tote Malerei)ではなく、音声と形象とが生み出す律動性に基づく「生きた行為」(die lebendige Handlung)であって、それは自然界の多様な事象の内に脈動する生の根源的リズムと呼応しながら、人間世界のできごとをその本源の様相において描き出すものであった。後の言語論の中でもヘルダーは、名詞的文体中心の、悟性による冷たい思惟の支配する啓蒙主義時代の言語に対し、動詞に貫かれ豊かな感性と情動とを表す始原の言語を対置させ、始原の言語の持つ力動性を積極的に評価しており、その考察は文学の領域においてはシュトゥルム・ウント・ドラング期の反理性的文学運動を理論的に擁護することになった⁽²⁶⁾。それに呼応するように、ここでの詩の音楽的律動性の強調は、詩の根底に流れる民族の生きた感性を無視し、規則的で表面的な字義解釈にのみ拘泥する合理主義的研究方法を

厳しく批判するものであった。

ヘルダーは、詩とは民衆がそれによって「世界生成の夢を語り、法を制定し、軍隊を鼓舞し、父祖の教えを子孫に伝え、酒と恋を歌う」ものであり、「民族の魂の精華」であると述べているが、詩は各風土に根ざした民族の生活の直截で全的な表出であり、その土地と時代に生きる人々の心情の如実な反映に他ならなかった。その中でも彼によれば、始原の詩においては民族の宗教性が詩の本質的ありかたに決定的な係わりを持っていた。「原初の祈りは必然的に歌であったにちがいない⁽²⁷⁾」。このように推論するヘルダーは、歌謡の宗教的側面が例えばギリシアにおいても明確に認められることを、最古のギリシアにおける詩作品の名称である $\rho\mu\upsilon\omicron\iota$ と $\kappa\alpha\theta\alpha\rho\mu\omicron\iota$ という言語使用例を取り挙げて立証し、ヘブライ以外の民族においても祈りの要素が詩の成立に不可欠であったことを明らかにするのであるが⁽²⁸⁾、彼にとってはそのような詩の宗教性はさらに進んで人類の始原状態における心的特性に探られるべきものであった。彼によれば、人類の自然状態とは「弱さと欲望」(Schwachheit und Bedürfnis)であり、最古の人類は「恐れと希望」(Furcht und Hoffnung)に心を占められていた。民族はその始原の状態においては思考の光によって啓蒙されておらず、理性による合理的判断に依拠することはできなかつたのであり、まさに「無知と迷信」(Unwissenheit und Aberglauben)が彼らの生活を支配していた。彼らは自然現象を原因・結果の因果律によって洞察することができなかつたので、多様で矛盾に満ちた自然の諸事象を前にその都度心を驚かし、恐怖を感じたのであり、その生活はまさに自然の営みの偶然性に委ねられ翻弄されていた。人々は無防備のまま裸で外界の危険に晒されており、存在の不安定性のうちにその生を営んでいたのである。そしてヘルダーは、そのようなぎりぎりの極限状態で、人々は存在の安定を神に請う他に術はなかつたと考察する。すなわち人々が恐怖によって自己の存在の根源に立ち帰り、心の奥底の衝動にかられて口から発する感覚的で力強い叫びは、それが危機に瀕した生の救いへの欲求を主旋律とする限り、まさに祈り以外のなにものでもなかつたのである⁽²⁹⁾。そしてその叫びは同時

に、アクセントを具え、生命の根源的リズムに呼応し、人間の情動の力動性を具えたものである点で、詩であり歌に他ならなかった。「最初の宗教が運命の出来事から生まれた時、文芸は生命と動きを得た⁽³⁰⁾」。「宗教は文芸を必然的にする最初の欲求のひとつである⁽³¹⁾」。このように語るヘルダーは原初の詩が民族の祈りと相即不離の関係にあることを見て取っていたのである。

そしてさらに、この祈りとしての詩にヘルダーは人類の世界認識における固有のダイナミズムを見出していた。始原状態にあった民族は、外界の自然を客観的に考察して合理的な因果律の下に秩序づけることはできなかったが、しかしそれだけに自らの感受性に全的に立脚した、豊かな情動に織りなされた世界解釈を行っていた。人間は外的自然の多様な現象の混沌を自己との関わりで類推的に統一したのであり、すなわち自然における諸事象の変化、対立のうちに自己へ直接利害を及ぼす作用を認め、四大元素を初めとした自然界の諸々の構成元素にその作用の原力を見出した。古代人の宗教感覚はこの不可視の原力を祈りの対象とし、それは彼らによって神々として崇拜されることになる。対象の比喩化、擬人化を認識行為の中心に置く古代人にとって、神々は彼らの想像力に、喜怒哀楽を具えた人間と同等の行為者として現れ、そこには党派心、野心、復讐心、嫉妬心といった情感に満ちた生々しい人間像が反映していた。古代の詩にはこの自然の原力としての人間の神々の誕生・死滅、対立・融和を中心とした躍動感溢れる絵巻が繰り広げられていたのである。ヘルダーは始原の詩が持つ力動性と躍動感の源を古代人の感性的で比喩的な認識行為に基づいたいわゆる神話世界に認めていた⁽³²⁾。

そしてまた、ヘルダーはこの祈りとしての詩には民族の英知が凝集されているとも解釈する。彼は、最古の詩人は祈禱の起草者として祭司であると同時に、統治者、哲学者でもあったと推測しているが、それは当時、世界を統べる真理としての知が、詩的形象と比喩とによって表されていたことを意味している。哲学的英知が近代では、理性による先験的で抽象的な思考法によって、論理的厳密性の許に獲得されるとすれば、古代において

はそれは神から示された生ける言葉として直観的に、感覚すべてを挙げて受け止められるべきものであった⁽³³⁾。知とは祈りによって初めて獲得されるのであり、歌謡を通して広く伝達される性質を具えていた。「民族の神」から与えられる知は、父祖代々の歴史の内に育まれ、民衆の日常生活に根ざした実際的な箴言となるのである。

さて、このような一連の詩歌についての考察によってヘルダーが特に強調し、人々の反省を促す点は、始原の歌としての祈りが、近代の一般的な祈りと本質的に異質のものだということであった。彼によれば、自然の諸事象が冷静な分別によって、合理的な自然法則の下に恐れや驚きなしに説明されうる理性的時代には、祈りそれ自体が存在の極限から発せられたかっつての烈しい急迫性を失ってしまっている。近代では人々は神を観念性の下に抽象化して捉え、神は生に直接関わりを持つ実在者として体験のうち具体的に理解されることがないのである。古代には人間は恐れ、不安といった存在の根源的情動に突き動かされて、自己の存在の確固たる拠り所を絶対者に求めずにはいなかったが、近代において、理性による合理的思考法に全幅の信頼が寄せられ、それが人間存在の唯一確実な立脚点となった時、人々は神を自己の論理の合理性を補完するものとして、理性の枠内に位置づけることに努め、宗教の生きた核心部であるはずの神との全人格的交わりが見落とされてしまった。そしていわば観念の上で作り上げられた道徳的完全性が宗教の中心に位置することになった。「われわれの時代には自然は眠っている⁽³⁴⁾」。「経験と学問によって獲得されたわれわれの自然についての知識は、各々の事象の内に住む恐るべき魔神と呼ばれるものを駆逐し、その場所に自然原因を据えた。その自然原因は祈りによって変化させられないが、才知によっては回避できるのである。……どの変化にも神的光でなく、自然の光が当てられている。このような平穩のうちにあっては詩歌は疑いなく失われてしまう⁽³⁵⁾」。このように語るヘルダーは、近代の合理主義的世界観において、理性が人間の感覚性、不合理性を含めた存在の全体を視野に入れずにひとり歩きしている事実を批判し、真実の祈りと歌は生の内奥から、合理性では割り切れない存在の真実相から

のみ生まれ出るのであり、理性によって一義的に判定しうるものでないことを強調するのである。

さて以上の文芸一般の起源についての考察と、そこから導出された古代人の祈りの必然性についての見解は、ヘルダーにとっては旧約聖書解釈にそのまま適用されるべきものであった。すなわち古代のイスラエルの民族は自らの情動に満ちた生活感覚から神を求める祈りを発し、その民族的な生きた感性と信仰心とから旧約は生まれたのであって、そのような具体的な人間的側面から改めて旧約文書の持つ意味が捉え返されることが要求されるのである。そしてくり返して言うならば、その際、当時のお主流を占めていた、伝統的教義の遵守と確立にのみ固執した、スコラ的正統主義の観念的で一義的な聖書解釈には厳しい批判の目が向けられる。そこでは神の言の絶対性にのみ関心が向けられて、その受け手であり解釈者である人間それ自体は考察の対象にされていないからである。ヘルダーによれば、神はその完全性のまま直接人間の悟性に語りかけるのではなく、人間の「弱さ」にこそ目を向け、それに応じた形で多様に自らを顕現させる。神の完全性は人間の認識能力をはるかに越えたものにちがいないので、その超越性を観念上で云々するよりも、人間に対する神の実際の現れ方に目を向け、具体的な関わりにおいて神に向い合わなければならない。そして、神の働きかけが人間の言葉によって表される場合、その「虚的な高次の特性」は、制限された特定の時代・風土に生きる民族の生活感覚という「低次の段階」に下ろされて初めて叙述可能なものとなるので、時代状況、思考様式、民族性等をよく踏まえた上での考察が望まれる。ヘブライという一民族の人間の側面を無視して、理性という抽象的判断基準に拠って聖書を一義的に解釈することは、彼らの信仰の真の理解を妨げるものだとヘルダーは主張するのである。

4.

旧約の諸文書の個々の記述をヘブライ民族の当時の実際の生活と心情と

からいかに説明するかという具体的叙述の段階で、ヘルダーは筆を擱き、『叙情文芸史試論』は未完に終わっている。そして生前に出版されることはなかった。この事実からわれわれが推測できることは、確かにこの著作には彼の卓抜な旧約解釈の一端が認められるが、しかしその論述の仕方を掘り下げてみても明らかなように、リガ時代前期においては、ヘルダー自身の内でまだ彼固有の旧約聖書解釈の方向が明確には定まっていなかったのではないかということである。つまりそれは、ヘルダーにとって各時期を通しての共通の問題であった、旧約聖書の民族詩と普遍的宗教性というふたつの側面の考察がまだ十分に彼の内で統合されていなかったことを意味している。実際、この著作においては、旧約聖書の文芸としての位置づけの前提条件が詳細に考察され、その民族詩としての相対化と人間的側面の強調とに主眼が置かれ、旧約の神的特性、すなわち旧約聖書に普遍的に表された神の直接の啓示の問題については殆ど触れられていない。例えば、後の時代に強調される、創造における神の側からの働きかけに関する見解、すなわち人類の歴史はその始点において、超越的絶対者からの人間を越えた一方的基礎づけなしには成立せず、その後の歴史の展開は神の導きによって支えられるとする見解はまだこの時期には彼の念頭に明確には現れていない。この当時のヘルダーの旧約の民族詩としての理解は、したがってある意味で合理的的色彩を帯びていたと言えるかもしれない。それは文芸の成立の必要条件として、宗教の人間の側からの意味づけが強調されるために、人間世界への神の現実の介入という、旧約成立において不可欠な要素である神の側の契機が視野に入れられていないということと関連している。

プロスも指摘するように⁽³⁶⁾、『叙情文芸史試論』には、ヘルダーが叙述にあたって拠り所とした様々な思想や研究方法が比較的明瞭な形で読み取られるが、それを追ってみても、確かに彼の考察方法の内には、当時の様々な合理的研究方法の影響が認められる。例えば、始原の詩に歌われた形象や事象を、当時の歴史の人物や出来事から具体的に引き出すエウエメロスの解釈法が明らかに認められるし、また、古代における人間の心的状

態を「無知と迷信」という図式から把握する考察には、ヒューム的な宗教理解を見出すことができる⁽³⁷⁾。「彼ら（ヘブライ民族）は感覚的思考様式に、神の可視的な顕現に馴染んでいたもので、神を到る所で、自然の変化の内に見出した。カインは畑が不作だと、神の無慈悲を思い、犠牲を捧げるべきことを感じた。……アダムがパンを額に汗して食らい、いばらとあざみを刈り入れ、エヴァが苦しみながら子供を生む時、彼らは神の呪いを目のあたりにした⁽³⁸⁾」。例えばヘルダーはこのように語り、旧約聖書におけるできごとを自然の具体的事象とそれに深い関わりを持つ民族の生活とから説明することを試みた。しかしそれは勢い、旧約の内なる宗教的真実さえも特定の歴史の一時期に限定することに繋がった。あえて言えば、当時のヘルダーにはまだ、聖書の宗教的内実がそれほど切実に実感されていなかったのではなからうか。そしてこの点においては、1769年のリガからパリへの航海がヘルダーにとって決定的な転機となる。『批評論叢』（1769年に出版されたヘルダーの芸術論集の書名）など書かなければよかったのに」という痛切な悔恨の言葉がはっきりと示しているように、この航海途上、海上の自然力に身を委ね、存在の極限状態を経験し、そこから発せられる人間の信仰の必然性を自ら実感したヘルダーは、自己のそれまでの思考様式を伝来の合理的思考路線に基づくものとして厳しく批判し、旧来の学問方法に囚われることのない、対象の存在を見据えた真に独自の思想の構築を目指すことになる⁽³⁹⁾。そしてこの航海を転機に、ヘルダーは旧約聖書解釈においても、民族の時代的、風土的生活様式の客観的考察に依るだけでなく、その内に示された宗教的内実という信仰の領域の事実を深く了解し、それに目を向けて解釈を進めていくことになる。

もちろんその一方で、『叙情文芸史試論』に、合理的思考では割り切れない彼固有の独創的な視点や、将来展開すべき思想の萌芽がすでに見て取れることは否めない。対象をその起源に溯り生成的に把握する考察法は後の歴史主義的解釈の展開にとって重要な始点とみなすことができるし、また、人間の「恐れ」に基づく祈りの急迫性についての考察は、人間の内部心理の現象性からその存在のありかたを探る後のヘルダーの人間学と深い

関連を認めることができる。そしてさらに、古代の歌に支配するリズム的躍動性への着目は、『言語起源論』に代表される彼の言語論の基礎をなすものであった。

そしてその中でも特に注目すべきことは、この作品を始点として展開されるヘルダーの一連の旧約聖書解釈によって、当時のドイツ文学に大きな刺激が与えられたことである。それは、ヘルダーによって純粋な詩芸術としての聖書の側面が明らかにされたことにより、ゲーテを初めとした多くの文学者が詩的素材の宝庫としての東洋に目を向け、そこから自らの作品を生み出す滋養を獲得したことである。ゲーテはヘルダーの旧約聖書解釈について次のように語っている。「旧約聖書のかかなりの部分は、高められた志操で熱狂的に書かれており、文学の領域に属している。いまヘルダーとアイヒホルンがこの点に関して親しくわれわれの蒙をひらいてくれた時代をいきいきと思い起すと、東方の至純な日の出に比すべき高次の悦楽が思い出される⁽⁴⁰⁾」。ゲーテの『西東詩集』を初めとして、シュレーゲル兄弟に代表されるロマン派のオリエン特研究という一連のドイツ文学の展開は、このヘルダーの旧約聖書解釈に基礎を置いたものともいうことができるであろう。

注

ヘルダーからの引用はゾーフアン版 (Johann Gottfried Herder, *Sämtliche Werke*, hrsg. von B. Suphan, 33Bd., Berlin 1877-1913) により、略号SWを用い、巻数はローマ数字で表示した。

- (1) 関根正雄著『旧約聖書文学史 上』(岩波全書 1978年) 7ページ以下を参照。
- (2) Vgl. Rudolf Haym: *Herder nach seinem Leben und seinen Werken*. Neudruck Berlin 1954, Bd. 2, S. 21ff.
- (3) Vgl. Luis Alonso Schökel: *Das Alte Testament als literarisches Kunstwerk*. Köln 1971, Zur Einführung.
ロウスの平行法に関しては、『ロマーン・ヤコブソン選集3 詩学』(川本茂雄・千野栄一監訳 大修館書店 1985年) 102ページ以下を参照。
- (4) SW XXXII, S. 93.
- (5) *Ibid.*, S. 94.
- (6) *Ibid.*, S. 96.

- (7) この著作の執筆期については若干の問題があり、ゾーフエン版全集では1764年とされているが、ハイムは66年から67年の成立と見なしている。ハンザ版著作集でも作品の内容上はこのハイムの推測が妥当であるとされており、本稿ではハイムに従った。
- Vgl. Johann Gottfried Herder, Werke, hrsg. von W. Pross, Bd. 1. München 1984, S. 693ff.
- (8) Vgl. Haym: a. a. O., Bd. 1, S. 42ff.
- (9) Vgl. Karl Aner: Die Theologie der Lessingzeit. Hildesheim 1964, S. 3ff.
麻生建著『解釈学』(世界書院 1985年) 58ページ以下を参照。
- (10) Vgl. Haym: a. a. O., Bd. 1, S. 43.
- (11) SW XXXⅢ, S. 28f.
Vgl. Wolfgang Pross: Johann Gottfried Herder. Abhandlung über den Ursprung der Sprache. Text, Materialien, Kommentar. München 1978, S. 219ff.
- (12) ジュースミルヒが自己の言語神授説を提示した論文『最初の言語の起源が人間ではなく、創造主にのみ発することを証明する試論』は1766年に発表されており、ヘルダーは遅くとも67年にはその著作を読んでいた(67年10月31日付 Scheffner 宛書簡参照)。この事実と『叙情文芸史試論』の内容とを合わせて推測すると、『試論』の執筆期は66年から67年にかけてが妥当だと思われる。
- (13) Yoshinori Shichiji: Herders Sprachdenken in seinen frühen Schriften.
In: Bückeburger Gespräche über Johann Gottfried Herder 1979.
Rinteln 1980, S. 141ff.
- (14) Jürgen Brummack: Herders Theorie der Fabel. In: Johann Gottfried Herder 1744–1803, hrsg. von G. Sauder. Hamburg 1987, S. 260.
- (15) SW XXXⅡ, S. 86f.
- (16) ヘルダーの有機的人間論については、大村晴雄著『ヘルダーとカント』(高文堂出版社 1986年)の内の「人間」の章に詳しく論じられている。
- (17) ヘルダーは『みだれ草紙』第3集に収録の論文『形象, 詩, 寓話について』の中で詩の成立を人間の認識行為との関係から論じている。Vgl. SW XV, S. 523ff.
なお彼の認識論については拙論「ヘルダーにおける神話の問題」(慶應義塾大学独文学研究室『研究年報』第6号 1989年 76–92ページ)を参照。
- (18) Vgl. SW XV, S. 526.
- (19) SW XXXⅡ, S. 97.
- (20) Ibid., S. 91.
- (21) Ibid., S. 94.
- (22) Vgl. Pross: Anmerkungen. In: Johann Gottfried Herder, Werke, Bd. 1, S. 709.

- (23) Vgl. Johann Gottfried Herder, Werke in zehn Bänden, Bd. I, hrsg. von U. Gaier. Frankfurt a. M. 1985, S. 931ff.
- (24) Der handschriftliche Nachlaß Johann Gottfried Herders, hrsg. von H. D. Irmischer und E. Adler. Wiesbaden 1979, XXV 179.
- (25) SW I, S. 152.
- (26) ヘルダー『言語起源論』(木村直司訳 大修館書店 1975年) 190ページ参照。Vgl. SW V, S. 83ff.
- (27) SW VⅢ, S. 193.
- (28) *υμνοί*は神を誉め歌う讃歌であり, *καθαρμοί*は清めと贖罪の歌であった。
- (29) Vgl. Heinz Peyer: Herders Theorie der Lyrik. Winterthur 1955, S. 53ff.
- (30) SW XXXⅡ, S. 111.
- (31) Ibid., S. 105.
- (32) 『叙情文芸史試論』では旧約聖書を神話として理解する方向はまだ特に明確には打ち出されていないが, 旧約文学に神話という類型を認めるか否かについては最近の旧約学においても興味深い問題として論じられている。これに関しては関根正雄著『旧約聖書文学史 上』105ページ以下を参照。
- (33) ヘルダーによれば, 詩はアリストテレス以降初めて, 神的起源から分離されて考察されることになり, さらに時代が下ると詩と哲学と宗教が完全に分離独立することになった。
- (34) SW XXXⅡ, S. 113.
- (35) Ibid., S. 117.
- (36) Pross: Anmerkungen. In: a. a. O., S. 696.
- (37) ヒュームは『宗教の自然史』の中で, 古代人における宗教の成立過程を追い, 宗教の成立原因を無知な人間の「恐れと希望と迷信」に見出している。若きヘルダーのヒュームの思想との接触はハイムも指摘しているが, この両者の関係, 特にヘルダーの人間学にヒュームの思想が及ぼした影響を探ることは興味深い課題である。
- Cf. David Hume, Philosophical Works, edited by Thomas Hill Green and Thomas Hodge Grose, Vol. 4. London 1964, p. 315.
- (38) SW XXXⅡ, S. 132.
- (39) Vgl. Erich Ruprecht: Geist und Denkart der romantischen Bewegung. Durchgedacht bis zur Gegenwart. Pfullingen 1986, S. 17ff.
- Heinz Gockel: Herder und die Mythologie. In: Johann Gottfried Herder 1744–1803, hrsg. von G. Sauder. Hamburg 1987, S. 411.
- (40) Goethes Werke, Hamburger Ausgabe, Bd. 2, S. 128.